

## 図書紹介

C. A. Fisher: *A Social, Economic and Political Geography, South-east Asia*. Methuen, London, 1964. xix+831p.

シェフィールド大学フィッシャー教授がついに大著「東南アジアの社会・経済・政治地理」を刊行された。たまたま、クアラルンプールの書店で、かねがね出版の噂をきいていた本書の実物を手にして、とうとう出たかとの感を新たにしたのであった。

序文の冒頭にいわく、「ひとつの題目で40万語あまりを書きおえたとき、できればこれ以上書きたくないとの気持ちに抗しきれないだろう」と。まことに気負った書き出しだ。また第2次世界戦争直前からこの仕事をはじめ、3年半以上にわたる現地での抑留生活、そのあとひきつづき東南アジアの各地を調査したという20年以上にわたる長い経験。そしてそれをもととし、しかも40ページに近い付録の文献目録からも明らかのように、大なる文献渉猟とをもととしての業績。フィッシャー教授が当然にこの出版に気負っておられるし、またわたくしもこれを手にして感動せざるをえないのだ。

もちろん、わたくしは900ページに近い本書を読みおえていない。しかし、East および Spate 両教授編集の *The Changing Map of Asia* (1st ed. 1950, 4th ed. 1961) 所収のフィッシャー教授の長論文“South-east Asia”（これは本書の第1部の骨子となっている）を東南アジア地理として最もすぐれた文献のひとつとして推すわたくしとしては、本書がおそらく東南アジア地理として最高水準にあるものとして推すことに躊躇しない。

本書はつぎのような構成をとる。第1部は統一体としての東南アジアであり、総論にあたる。東南アジアの性格、自然環境、住民等のをうけて、120ページにわたって歴史的過程が明らかにされている。第2部は赤道島嶼部であって、インドネシアにあてられ、インドネシアの自然条件、文化的歴史的基礎、第1次第2次世界戦争間の蘭領東インドの経済・社会地理、新インドネシアの経済的諸問題と政治的諸問題、西イ

リアンの諸問題が述べられている。第3部は熱帯大陸部であり、その自然的基礎、ビルマ、タイ、インドシナの章に分けられる。第4部は赤道大陸部であって、4章がマラヤと英領ボルネオにあてられる。第5部は熱帯島嶼部でフィリピン。第6部はエピローグとして、東南アジアと世界との関係が論ぜられる。

とにかく、大冊である。わたくしは、ただ1章だけあたえられているタイについての部分を丹念に読んだが、わたくしの知るかぎり、ひとつの誤謬も見出されなかった。もちん、地理学者が経済・政治・社会問題を論ずるときの弱さ——それは地理学者の宿命であろう——がなきにしもあらずだが、よくぞこれだけまとめあげたものだ、心から敬意を表せざるをえない。これがわたくしの一言にしてまとめうる感想だ。

(本岡 武)

Ronald McKie: *Malaysia in Focus*. Angus and Robertson, Sydney, 1963. xiii+236p.

去る1月27日づけの *Life International* 誌のアジア問題特集号は、パキスタンから日本に至るアジア諸国をカバーしている。その論旨は Time-Life minded と批難されるきらいはあるものの、きれいな写真で助けられて、アジア諸国の現実の問題点を、おもしろく解説している。

このアジア問題特集号のうち、マレーシアに関する解説は、ここに紹介する本書の抜萃でもってあてられている。

*Life* 誌が本書をそれほど高く評価していることから推察されるように、なかなか明快に、また興味深く、マレーシアの最近の姿をとらえている。著者のロナルド・マッキー氏は、オーストラリアのジャーナリスト。旅行記というよりも、訪問旅行のすぐれた印象記をおもしろく書くことで知られている。この本も、その意味では成功している。

とりわけ、オーストラリアが、東南アジアにたいして、いかに強い関心をもっているか、そのオーストラリアと東南アジアの結びつきが本書に強くあらわれて

いる。また、著者はマラヤ・シンガポール・サバ・サラワクからなる大マレーシア連邦が結成される過程において旅行し、昨年8月の結成後に本書を出版したわけである。この時期に書かれただけに、なかなか重要な点が見つまれている。オーストラリアがこの大マレーシア連邦の結成に、きわめて好意的なことが、そのふしぶしでうかがわれる。

内容は、シンガポール・クアラルンプール・マレーシアの3部にわかれ、追記としてブルネイがある。旅行記として、マレーシアの風物の敘述もたくみであり、human behaviorの描写にもすぐれてはいるが、とくに興味深いのは、政治的・文化的エリートとの面会記である。シンガポール首相リー・クアン・ユー、政治家のデヴィッド・マーシャル、共産党指導者のリム・チン・シオン、さらにクアラルンプールではマレーシア首相トク・アブドゥール・ラーマン、マラヤ大学経済学教授ウンク・アブドゥール・アジズ、作家ハン・スウィンをはじめ、多くのエリートに面接する。

もっとも、これら面会記を読むと、どうも旅行者の印象であり、かなり主観的・一面的だと思われるふしがないわけではない。たとえば、わたくしが知っているアジズ教授と、ここにあらわれてくるアジズ教授とは、だいぶんちがっている。はじめて会った外国人の思想や行動をとやかくいうのは、いかにむずかしいことか。

しかし、それが主観的・一面的であろうと、この人種構造の複雑な、そして国家としてのunityを実現することの困難なこの国の現状を、きわめてヴィヴィッドに描いたものとして、本書はまことに興味深い。今日のマレーシアについてのすぐれた紀行記だと思う。  
(本岡 武)

Louis J. Walinsky: *The Planning and Execution of Economic Development*. McGraw-Hill, New York, 1963. xiii+248p.

著者ワリンスキーは、1950年代の約10年間、Robert R. Nathan Associates, Inc.の一員として、ビルマの経済計画の調査と設定とに献身した。かれの体験をとおしてのこの国の経済発展の経過は、かれの大著*Economic Development in Burma*. 1951~60. に詳しく描かれている(本誌第1号書評参照)。

このビルマにおける長期にわたっての経験、さらに加えて韓国・イラン・アフガニスタン・エルサルバドルおよびボリビアにおける短期間の経験をもととして、低開発国において経済発展がいかに計画され、いかに遂行されるべきか、それをnon-technicalな、またoperationalな方法で明らかにしようとしたのが本書である。だから、これ、*Economic Development in Burma*の副産物であり、続論であるといえよう。

本書は、第1部のPlanning、第2部のExecutionおよび第3部のSome Practical Approachとからなる。付録として、先進国と後進国との比較図表、低開発国の若干の経済指標、低開発国援助機関の表、アメリカおよびその他の諸国の低開発国援助概要、世界銀行借款概要、中ソの経済援助概要、および計画評価論があり、最後に経済計画に関する文献があげられている。

もともと本書は、低開発国における経済計画の立案者のために書かれたものであり、低開発国の経済開発理論ではない。どこまでも、実際に具体的に経済計画の設定と遂行に役立たしめようとするものであり、その意味で、きわめて、わかりやすいように努力が払われている。

とくに本書の価値としては、このワリンスキー氏の長い実際の経験がにじみでている点あげられる。しかも、かれが強調してやまないのはつぎの点にある。経済発展についての方式は決してひとつでない。それぞれの国のもつ条件や目的によって異なる。しかし、その成否は採用される目標・計画・プログラムおよび政策の現実性と継続性に、資源が利用され、計画が運営される効果性に、さらに事業の現実の困難性の認識とそれにもとづいての事業の遂行の決意とにかかると。この決意は外国から与えられるものでなく、どこまでもその国自身がくださなければならない。

わたくしは、この強調点はまさしくかれの多年の経験の結論であるとの感銘をうける。著者は、低開発国の政策立案者が、この決意のもとに、この書物を読んでほしいと切望しているのだ。

本書が詳しく述べている経済計画の設定と遂行については、原則的にわたくしには異論がない。だが、低開発国の経済計画立案ならびに遂行にあたるトップ・レベルのものが、いかにして現実的・継続的に決意を

もちうるか否か、ここに基本的な問題があるのではな  
かろうか。ビルマ、インドネシアの両国の現実は、わ  
たくしのこの疑問を裏づけはしないだろうか。

(本岡 武)

Clifford Geertz: *Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963. xx+176p.

近年 C. Geertz の意欲的な労作が次々に公表され  
ているが、彼が1956年に騰写刷りの形で発表した  
*The Development of the Javanese Economy: A Socio-Cultural Approach*. (The Center for Inter-  
national Studies, MIT.) は、かなり長い力作であ  
りながらも出版されなかった。この書物は、歴史概  
説、生態学的適応の様式、権威体系、都市化、観念体  
系の五つの部分から構成されている。この内の最初の  
部分が enlarge されて出版されたものが本書である。

題名の中の Involution とは、人類学者 A. Golden-  
weiser が最初に用いた用語で、一定の形式が安定  
化又は他の新しい形式に変形することに失敗し、内  
容的により複雑化し続けるような文化現象を意味す  
る。Geertz は、この概念をジャワの零細農業の在り  
方に適用して、その社会経済史的背景とそれが今後の  
インドネシア経済に持つ意味を本書において論及す  
る。

Geertz によれば、インドネシアには二つの伝統的  
な生態学的体系 (ecosystem) が存在する。即ち、焼  
畑的な swidden 農業と水田稲作の sawah 農業を中  
心とする二体系である。前者は、より多く自然の条件  
に依存し、主に外領地域と西南ジャワに分布してい  
る。後者は、人為的条件に依存する度合いが強く、主  
にジャワ、バリ島、西ロンボック島に分布している。  
Geertz は、この二つの ecosystem の相違を歴史的  
に考察する。

オランダの植民地政策の基本原理は、経済に関する  
限り、終始、植民地の経済構造を根本的に変形させず  
に農産物を世界市場に持ち出すことであった。この目標  
達成に三つの方式が歴史上用いられている。東印度会  
社、栽培制度とプランテーション制度である。特にジ  
ャワを中心とした栽培制度は、上記二つの ecosystem

の対照を際立たせる素因となったばかりではなく、イ  
ンドネシア経済の二重構造 (the capital-intensive  
Western sector and the labor-intensive Eastern  
sector) を確立することになった。swidden 地域で  
はコーヒーが、sawah 地域では砂糖が、輸出農産物  
として栽培を強化された。人口増加や生産方法の発展  
は、この二地域の区分を社会的にも顕著なものとし  
た。swidden 地域では、無産化が進行すると共に、  
農業生産物は専門化し、個人主義的傾向が強まった  
が、sawah 地域では、involution が深化して、土地  
の使用・保有法、共同生活、宗教までも、この傾向を  
反映して、貧困は分有された。

インドネシア農民が急増した人口を吸収する適当な  
場を持たなかったこと、そして、現に持たないこと  
が、インドネシア農業の生産性に致命的であることを  
Geertz は、さまざまな角度から分析する。しかし、  
本書のオリジナル・プランが、先きに触れたように、  
社会や文化の側面を含むものであるため、未だ総てが  
論じ尽されていない感があり、残余の部分の出版が待  
望される。(口羽益生)

陳荆和：『十六世紀之菲律賓華僑』新亞研究  
所東南亞研究室(東南亞研究專刊之二)。香港。  
1963年。vii+161p.

東南アジア華僑に関する論著は数多いが、現状の分  
析、考察を主としたものが大部分で、歴史研究に重点  
をおいたものは甚だ乏しい。しかし現状の考察に資  
し、将来を推測する手がかりを与える点で歴史研究が  
重要なことはいうまでもなく、かかる意味で本書のご  
ときを得たことは喜ばしい。

著者はかつて日本に学んだことのある人で、元国立  
台湾大学助教授、現在香港にある新亞学院の歴史学教  
授をつとめ、東南アジア史の研究では目下最も活躍し  
ている中国人学者の一人である。ベトナム史に関する  
論考や、史料の解説、紹介が多いが、本書は氏がかつ  
てフィリピン華僑に関して諸雑誌に発表した論考を補  
訂、集成したものである。

スペインによるフィリピンの植民地化はフィリピン  
華僑史の上において画期的重要事件であった。これを  
契機として華商のマニラ貿易が発展し、華僑の著しい  
増加をみた。しかしこれはやがて、在フィリピンのス  
페인人に華僑に対する恐怖と警戒心を生ぜしめた。

この間に起こったのが海賊林鳳のマニラ襲撃事件である。かくて植民地政庁も当初の華商誘致をはかる寛大な方針を改めて、その抑制と圧迫につとめることになった。本書はこの間の諸事実についてスペイン側史料と中国史料の双方を用いて克明に論述しており、従来の研究に一步を進めたものといえることができる。

内容は本論4章と附録1より成り、第一章「西班牙之領属菲律賓」では、レガスピのマニラ占拠までのスペインとフィリピンとの関係、この期間における華商のフィリピン諸島における貿易活動について述べ、併せてマニラ占拠後におけるその貿易の発展と、スペインの植民地経営上における貢献について説いている。第二章「中国海盜之寇擾」では、林鳳のマニラ襲撃事件の顛末と、その直後における中国・フィリピン間の官交交渉について述べ、これらが中国や中国人に対するスペイン人の恐怖と警戒心を惹起させる原因となったことを説く。第三章「華僑管制政策之開端」は華僑に対する三分税の創設と、マニラ華僑の居留地としてのパリアン設置について述べたもので、なお当時のマニラを舞台とする中菲貿易の繁栄と同地華僑の増加、華僑に対するスペイン側のキリスト教伝導工作、パリアン内部の状況についても記している。第四章「十六世紀末年之菲律賓」は16世紀末のフィリピンの内憂外患と、この期における当局の対華僑政策について述べたもので、華僑の華布着用禁止令などの華僑圧迫策の実施、さらに華僑潘和五の叛乱事件と、その後における華僑の帰国強制などの華僑圧迫の強化について詳細に説明している。なお附録は「菲律賓華僑史上的人口及居留地」と題し、1570年より1947年までの間のフィリピン華僑人口の動態、居留地の変遷に関して諸文献より得た資料を年代順に列記したものである。

要するに本書は表題の16世紀のフィリピン華僑の研究としてはすぐれたものであるが、フィリピン華僑史の上で重要な17世紀以後には及んでおらず、この点甚だ惜まれる。続編の出現を期待する次第である。なお著者は記していないが、Blair and Robertson: *The Philippine Islands*. 55v. の中から華僑史料を抽出列挙した呉景宏氏の『西班牙時代之菲律賓華僑史料』(南洋研究, 第1巻, 1959). が出ており、フィリピン華僑史研究に頗る便利であるので附記しておく。

(藤原利一郎)

*Thai-English Student's Dictionary*. Compiled by Mary R. Haas, with the assistance of George V. Grekoff, Ruchira C. Mendiones, Waiwit Buddhari, Joseph R. Cooke, Soren C. Egerod. Stanford University Press, Stanford, California. 1964. xx+638p.

この辞典は現在手にし得るタイ語の辞典として最も新しいものであると同時に、最もすぐれたものだといえるであろう。ここでいう「すぐれた」というのは、単に語の意味や品詞がわかるというだけでなく、その単語の用いられ方、あるいはタイ語の中での動きかたがよく解るといことである。この事は、タイ語を母国語としない我々にとって、特に有難いことである。こういった意味で、タイ語を習い始めたばかりの人達にとっても、またそれを専門的に研究している人達にとっても、本書は非常に有用である。本書をこの様な有用な辞典としている要因として次の様な点をあげることが出来るであろう。

① 徹底した音素表記が用いられていること。従来のタイ語辞典は、それが英語を母国語とする人達を対象にするものであれば、英語の正書法にもとづく表記法を用いていた。これに対し本書では、誰にでも容易に理解出来る音素表記を用いている。この表記法は、同じ著者による *The Thai System of Writing*. Washington D. C., 1956. のそれと原則的には同じであるが、stress 及び intonation が表記されている点で、本書の方が更にすぐれているといえる。stress については、例えば、/phaasǎa/ 《言語》における第一音節 /phaa/ は、実際の会話ではしばしば弱められて [phə] となるが、第二音節の /sǎa/ は常に上昇型のトーンで発音される。すなわち /sǎa/ は “stressed syllable” である。この様な “stressed syllable” はいつも /' / でもって明記されている。また intonation は三つの型に分類されて、それぞれ ↑, →, ↓ でもって表記されている。更に綴字と発音とが余りにかけ離れている場合には \* を符して注意をうながしている。以上の様な配慮がはらわれている点から、本書の表記によれば、実際の発音をかなり正確に知ることが出来るであろう。

② 必要に応じて単語の “level” が示されている。例えば、《to eat》を意味する最も一般的な形 /kin/ は “common” であり、これに対して /dɛŋ/ は、

同じ《to eat》でも、“vulgar”であるといった様に、単語の level が示されている。この社会的に定まった level は、我々外国人にとって最も困難な問題の一つだといえるが、この点について説明が加えられているということは、この辞典を非常に有用なものとしている。本書では、archaic, colloquial, common, deferential, derogatory, elegant, epithet, euphemism, expletive, figurative, idiomatic, illiterate, literary, obsolete, obsolescent, royal, sacerdotal, slang, vulgar, written の計 20 の項目が用いられている。

③ 各単語について、その単語を中心として作られる phrases や idioms があげられており、反意語、同意語も適当に示されている。更に、必要な場合には、“Note”の項を設けて、当該単語の用い方や似た意味を持つ他の語との相異などについて、例文と共に説明が加えられている。この様な意味で、本書は単に受動的に引くだけの辞書としてのみならず、タイ語を書き話す場合にも充分役に立つと考えられる。しばしば用いられる固有名詞、称号名、機関の名称なども取り入れられており、実用的である。

発音について疑問な点として、例えば、《本》を表わす語は /nǎŋsǎy/ が普通であるが、本書では /naŋsǎy/ と表記されている。この様な相異はタイ人の間でも個人的に変動のある可能性が強いから、両方を記して注を付すべきであろう。なお、p. v, 37 行の《to be big》を意味するタイ語形は誤植で、正しくは khoo khwaaj のかわりに too tàw を用いる。本書の最初の部分に付された Brief Description of Thai も有益である。(桂満希郎)

Hla Pe: *Burmese Proverbs*. John Murry, London, 1962. ix+114p.

本書は、School of Oriental and African Studies, University of London の教授でありビルマ語研究の第一人者の一人である Hla Pe 教授による。ビルマ語諺集とでもいうべきものである。著者自身も序文で述べている様に、本書はビルマ語の諺の網羅的な収集ではなく、また学問的な研究書でもない。しかし、ビルマ語を学習しテキストを読む段になると、役に立つところ大である。日常の会話、あるいは小説や新聞などにおいても、諺の用いられる頻度は、日本語

においてよりもビルマ語においての方が、はるかに高いといえるであろう。これらの諺は日本語の感覚からすれば意味を把握することの極めて困難なものが多いが、その様な際、本書は手ごろな参考書としてよく役に立つであろう。

本書は、Introduction, 本文, 原文から成る。Introduction においては、ビルマの諺に関する簡単な説明のほかに、Political Setting, Cultural Setting, Economic Background, Social Environment について、諺と関連を保ちながら、概略的な説明が加えられている。本文におさめられた諺の数は 496 であり、Human Characteristics, Human Behaviour, Human Relationships, The World, Man, の五項目に分離されている。本文にはこれらの諺の英訳とそれらに相当する英語の諺とがあげてあり、原文は romanize された形で巻末にまとめられている。代表的な諺は大体カバーされているが、明らかに外国からの借用であるものや、単なる言葉の遊戯、例え話などの類は除外されている。この撰択、分類の基準がややあいまいに思われるが、研究書ではないから、やむを得ないであろう。

上に述べた様に、ビルマ語を読む際の参考書としての実用的な意味以外に、本書にあげられた原文と英訳、あるいは英語の諺とを対照すれば、ビルマ語の簡結な表現法とかいわゆる「ビルマ語らしさ」を理解するという意味からも興味の持てる書である。この点から、巻末にまとめられた原文は、本文の英語と対照してあげられていた方がより良かったであろう。

(桂満希郎)

William A. Smalley: *Outline of Khmu? Structure. An Essay of the American Oriental Society No. 2*. New Haven, Connecticut, 1961. xix+45p.

クム語はラオス北部を中心に東北タイから北ベトナムにまで分布するモン・クメール系(パラウン・ワ語群)の言語であるが、これまでにこの言語について報告されることはあまりなかった。本書は著者が 1951—3 にルアンプラバン周辺で採録した資料にもとづく *Outline of Khmu Structure* (University Microfilms Publication No. 17,081. Columbia Univ. dissertation. 1956) を僅かに短かくしたものであ

て、簡単なものではあるが、この系統の言語の数少ない文献の一つとして注目に値する。

といっても、本書は単なる言語資料の報告といったものではなく、クム語という一つの言語体系の構造言語学的な記述なのであって、その方法はいわゆる“item and arrangement”のモデルによっている。それは簡単にいえば言語の音韻体系、文法体系のそれぞれを、素な要素と結合法とその結合条件とによって記述できるような一つの代数系としてとらえる考え方であるが、本書では実際の記述にあたっては、“items”と“classes of items”とを相対的な関係にとらえて“items, classes of items and constructions (i.e. classes of arrangements of classes of items)”を記述することによって、音韻体系、文法体系それぞれの階層的な構造を下位から上位へと記述している。この記述方法自体に問題がなくはないが、ともかくこれでクム語の構造を抽象的にとらえることができ、たとえば言語の類型学的研究といったものには多に役立つにちがいない。なお、そのためには全体の構造図を付すれば直観的な理解をより助けたかもしれない。

しかしそれでは具体的にクム語にどんな言い方があるか、ある意味をどのような形式で表わすかということは本書からは十分にはわからない。形態論が実際には“constructions”の記述に終わっていて“items”あるいは“classes of items”のメンバーが僅かずつしか掲げられていないからである。本書の規模からいってやむを得ないことだとはいえ、せめて従来の報告書の glossary に相当する“morpheme inventory”を基礎語彙に関してだけでも掲げてほしかった。モン・クメール系の言語は東南アジア諸言語の比較言語学的研究において特に重要なのだが、そのためにはまず語彙資料が第一に必要なのである。

なお、これまでに著されたクム語に関する文献には本書にも言及されている H. Roux の論文のほかに H. Maspero: “Materiaux pour l'étude de la langue t'èng” *BEFEO* 47 (1955) pp. 457-507 があってこのテン語と本書のクム語とは単に方言的な関係にあるに過ぎないと思われるが、本書では全くふれられていない。Maspero の表記法が不完全であるだけに両者の具体的な関係についての言及があれば資料としての価値が大いに高まったであろうと思われる。

(三谷恭之)

李全壽：「馬來語言與文學」許雲樵輯南洋研究叢書『馬來語研究講座』。新加坡世界書局，1961. pp. 29~58.

シンガポール自治政府が成人教育を促進するために、南洋大学の教職員を動員、分担して1960年8月22日から1961年1月9日まで、シンガポール文化会館で週に一回行われた「マラヤ研究講座」のまとめがこれである。地理、経済、工業化問題等々、16編収められている論文の中に、上記がはいっている。

この論文は、8節から成っているが、第一節「語言的定義」、第五節「文學的定義」などがあるのは、よほど、市民一般を対象とした講座であつたらしく、このような大きな問題が短い講演の合間に充分述べられ得る筈がなく、全体から見ると蛇足の感を免がれない。さて、著者は、マライ文學を「旧文學」と「新文學」とに分け、更に夫々を *Puisi* (散文)、*Prosa* (韻文) とに分類する。この「旧」と「新」とは何を根拠にしてこう分けたのか、第四節「馬來語文在馬來語的發展」を見ても、甚だ要領を得ない。然し、韻文を次の8種(それぞれを更に小分する)に分類する方法は、まだ問題があるにしても、一つの新しい試みといえる。1. *Bidalan* (諺語)、2. *Carmina* 或 *Pantun Kilat* (短詩或閃電詩)、3. *Pantun* (転喻式四行詩)、4. *Talibun* (多行 *Pantun*)、5. *Seloka* (諷刺詩或戲謔詩)、6. *Gurindam* (兩行諺詩)、7. *Sha'er* (史詩或敘事詩)、8. *Bahasa Berirama* (有施律的散文)。マライの四行詩、特に *Pantun* は一・三行、二・四行が脚韻を踏むところに特徴があり、中国の詩にもこれと似た平仄の法則があるために中国人の興味を引くらしい(編者の許雲樵にも「中国詩經与馬來班敦的比較研究」1963. という論文がある)。李全壽は *Pantun* を児童；青年；老年人 *Pantun* を三つに分ち、それを更に発想によって細分するという念の入れ方である。但し、*Seloka* の内の四行詩を戲謔詩と説明し、青年 *Pantun* にも諷諧詩があるところを見ると、その本質的、根本的な区別をどこでなすのか、それぞれに掲げられた例からは了解することが出来ない。各種の詩型を表わす用語を並べたて、唯それを小分類して見ても、結局は埒があかないのではないかと思われる。韻文を分類し得るような用語があるにも拘らず、夫々の詩の持つところの内容は非常に錯綜している。その含む意味も李全壽の分類のようなきっちり

と型に嵌まったものではない。又、1. 諺語の(4)として掲げている Tamthil (加用引子的譬喩)に Lain dulang lain kaki, lain orang lain hati. (人心不同←盆が違えば脚も違うように人が違えば心も違う)を引用しているが、これは厳密に言って彼の説くように第一句が「引子」で第二句が「叙述」ではない。第二句は第一句の単なる繰り返しに過ぎない(参照: Banyak orang banyak muka-nya. 十人十色)。次のような例をこそ掲げるべきであろう。Biar lambat, asal selamat. (急がば廻れ←ゆっくりやれば、安全), Tahu makan, tahu simpan. (食べ方を知る者は、保つ法を知る)

マライの韻文は、もっと大局的、有機的見地からの考察がなされねばならない。分類を行うのに性急になったため、その説得力が弱い感じの論であるが、試みとしては面白い。なお、散文も5種に分類しているが、大体同じことがいえる。(崎山 理)

Elinor C. Horne: *Beginning Javanese*. Yale University Press, New Haven and London, 1961. xxiii + 560p.

Yale Linguistic Series として、今まで、Russian と Chinese とが出ていたが、表記のようにジャワ語がこれに加わった。本書はこの表題から想像されるような「初学者」のためだけの入門書では決してなく、ある程度のジャワ語の知識を持つものにも、大いに活用し得るだけの内容を備えている。この書を作るために相当数のインフォーマントを得て、正確を期したことが序文からも知れるし、内容の構成法も、最近、諸外国語の速成教育に適用されて相当の効果を示しつつある Language Laboratory (L. L.) 方式に従って述べられており、文法用語を中心としてそれを各項目に分け、説明するという従来の形式を全く採用していない。即ち、Lesson 1. WHO'S WHO, 2. WHAT'S WHAT, 3. DAILY ACTIVITIES... といった具合に、最初から会話でもって易から難へと進む仕組みになっているが、文法事項を調べるための索引も比較的良く作られてある。

ジャワ語には、周知の如く、やかましい敬語法があり、丁寧な用法を Krámá [krómɔ] (更に上流階級同志で用いるのを Krámá inggil), 卑近な用法を Ngoko と称え、ジャワ語学習者はまずこの難関にぶ

つかるのであるが、この書では各 Lesson を Section A, B と分け、同じ文例をそれぞれの用法によって示しているのも、これまでのこの点の説明に関してとかく難渋の多かった文法書に比べて、強調されて然るべきより良い試みといえるだろう。唯、欲をいえば、これを見開きの中に対照して収めればもっと利用し易かったらうと思われる。なお、マライ・ポリネシア語全般にわたって tense の表し方がさほど厳しくなく、ジャワ語もその例に漏れないが、副詞の lagi が英語の-ing に当たるとして、Kowé lagi ora môtjô "you're not reading" のような例を示しつつ (p. 50, p. 427), Wông kuwi ora môtjô "That man isn't reading" (p. 317) の如き不統一を来たしているところもある。又、この著者は Locative forms という新しい項目を設定して、その中に受動形、能動形を分類しているが、その他にこれまでオランダ人によって "accidenteel Passief" と呼び習わされてきた k(e)...(an) をも含めさせている(マライ語にも同じ用法がある)。しかし、発生的にも機能的にもこれは本来の受動形とは異なる。Aku kélingan (← ilang) mugômugô. (Ng.) <<私は希望を失った>>。更に語根を名詞化する機能もある。kewarasan (← waras) <<健康>>。それ故に p. 437 に掲げられたこの項目の用法一覧表にも、k(e)...(an) は省いてあるが、元来、別に考察すべきものであろう。この用法は、発生的に自然界に存在する或る大きな力によって人間の無意識の内に引き起された行為を表現したと考えられ、その表現様式は今も残っている。

本書は、一貫して現在の日常会話を教えるのに目的があり、ジャワ文字など一切掲げていないし、又、それに伴うジャワ文学の例も殆んど載せられていない。これがこの大冊をして少々、物足りなさを感じさせる所以であるが、それを別にすれば、生きたジャワ語学書として推薦するに値する。(崎山 理)

E.C.J. Mohr & F. A. van Baren: *Tropical Soils. A Critical Study of Soil Genesis as Related to Climate, Rock and Vegetation*. Amsterdam, 1953. xiii + 473 + ix p.

共著者の一人 E. C. Mohr はオランダの土壌地質学者で、1905年から1920年にかけてバイテンゾルフ植物園の土壌地質研究所長として当時のオランダ領イン

ドネシアに滞在し、その後更に1930年にここを訪れて、『熱帯土壌一般殊に東印度の土壌』6巻を1932年に発刊している。戦後 Council of the Royal Tropical Institute, Amsterdam の委嘱をうけて、Utrecht 大学の土壌学教授 F. A. van Baren と共著したのが本書であり、その内容は、熱帯条件下での土壌生成が主要論点になっている。従って土壌の肥沃度、侵蝕、灌排水等の問題についての叙述は、それらが土壌生成に重要な関係をもってこない限り、省略されている。

内容は大別して2部から成る。第1部では熱帯条件下での土壌生成の一般論が展開されており、第2部で展開される土壌生成の個々の場合についての基礎的な側面を覆う。第1部では、気候(第1章, Atmospheric climate and soil climate), 母岩・造岩鉱物とその風化(第2, 3, 4章), 粘土鉱物の生成(第5章), 土壌中の鉱物組成(第6章), 器械的組成と土壌断面の特徴との連関(第7章), 有機物の形成と分解(第8章)がとり扱われている。第2部では熱帯での、殊にインドネシアでの土壌生成へ論旨が展開され(第9, 10, 11章), その他, Lateritic soils, Podzolic soils, Margalitic soils, Other important soil types, Classification of tropical soils についての各章が設けられている。

参考文献は今世紀初頭から1953のものに及び、必要なものは殆んど網羅されている感じである。Atmospheric climate and soil climate, Climate versus rocks, Clay mineral formation, Mineral association in soils, Lateritic soils, Margalitic soils. の各章の文献は充実している。景観, 土壌断面, それに岩石の風化状態, 土壌の生成の状況等を示す写真が豊富に収録され, 記述を助けている。又各地の気象データ, (殊に雨量データ), 母岩, 母材, 粘土鉱物, 土壌断面各層の化学組成を示すデータ, 造岩鉱物の種類と量を示すデータ等がとくに目につく。ともかく, 熱帯土壌学のこれ迄の業績と, それが現在かかえている問題を知るうえに又熱帯土壌を体系的に学ぶうえに貴重な本である。

土壌研究の場において, 著者は一応, 自然的概念の立場をとっているが, 発想の基本においては, ヨーロッパ流の地質土壌学の傾向が強い。このことは J. van Baren の pedological credo: "In the beginning was the rock, and the rock was the

mother of the soils" に対する著者の強い共感の念として表わされている。著者が水田や畑作地等の土壌, いいかえると, 外的因子として更に人為作用の加わってくる耕作地土壌を研究対象として選びたがらない, という姿勢がそこに出てくるように思われる。

土壌学が農業に何を寄与し得たか, 又し得るか, という点から, 著者が発刊を予告している次巻 *Tropical Soils and Crops* に大きな期待を寄せている。

(古川久雄)

Robert L. Pendleton: *Report to Accompany the Provisional Map of the Soils and Surface Rocks of the Kingdom of Siam*, Bangkok, 1953. Mimeograph. viii + 290p.

Robert L. Pendleton と彼にフィリッピンより同行した Sarat Montrakun は, 1935年にタイ国に腰をすえて以来, タイ国の土壌及び岩石の調査に従事し, 1946年に土壌図を発表。その後地方レベルでの精査を行い, 採取された土壌の化学的・物理的分析, 及び肥効試験を Sarot Montrakun が受けもち, 漸時蓄積された結果を Mutual Security Agency へ提出する為にまとめたのがこの報告である。土壌分析結果は別に大部の報告書, *Compilation of Chemical Analysis of Soils in Thailand* に収録されている。

この報告書は次の五部から成る:

1. Limitation of the Soil Map,
2. An Annotated Soil Legend,
3. Soil and Fertilizer Studies in Siam,
4. Geographical Material,
5. Principal Topographic Subdivision of Siam.

重要なのは第二部, 第五部の二つである。

第二部でタイ国の土壌を22の土壌型に分類し, その母材, 地形, 土性, 植生, 耕作形態等を主として述べている。Bangkok dark heavy clay, Ongkarak clay, Chiang Mai loam, Roi Et fine sandy loam 等重要な土壌型については, 土壌断面に観察される顕著な現象中植物養分の存否, 肥効テストの結果等に簡単に言及している。然し分類単位は soil series 程度のものや great soil group が並列され, 又各単位のなかでの分類の区別がさだかでない場合も多い。著者自身, ここで使う土壌型には, その特徴に非常に大きな幅があることを了解してほしい旨述べている。



第五部でタイ国を北部、中央部、東北部、東南部、半島部にわけ、地形、水系、植生、母材、土壌、灌漑、農業等、その叙述は多岐にわたっている。色と土性を示したのみのものではあるけれども土壌断面の記述も多い。中央部、東南部、半島部については既に別に報告書を出しているため、簡単な記述にとどまっているが、北部と東北部については豊富な記述がなされ、殊に東北部については、著者のフィールドノートから、一寸刻みの調査行程間での観察が刻明に書かれており、ほぼ同じコースをかつてジープで走りまわった私にとっては非常に興味深い。

この報告から我々が知り得るものは要約すれば次の2点になるだろう。

- 1 タイ国における土壌の調査・分類のこれまでの成果
- 2 この分類にもとづいた土壌型と土地利用の関係の概要。

なお、この報告を縮小再編した小冊子 (Robert L. Pendleton & Sarot Montrakun: *The Soils of Thailand*, 22p.) が1960年に出版されている。

著者の興味のポイントが土地利用の面にかたむいている為に、土壌の生成、分類、肥沃度といった土壌学自体の面での掘り下げが行われていないのは当然かもしれないが残念だ。この報告書を私にくれた Mr. Sarot Montrakun は温顔をほころばせて言ったものだ、ペドロロジーはエダフオロジーに奉仕すべきなのだ、と。(古川久雄)

Александр А. Губер: *Библиография юго-восточной Азии. Дореволюционная и советская литература на русском языке оригинальная и переводная. Издательство восточной литературы, Москва, 1960. 212p.*

本書は1964年4月24日京都大学を訪問したモスクワ大学教授アレクサンドル・A. グーベル博士から京都大学東南アジア研究センターに寄贈されたものである。グーベル教授はインドネシア、ベトナムをはじめ東南アジア全域にわたる著書や論文を多数執筆しており、ソ連における東南アジア研究の最高権威の一人

である。本書の編集は、A. M. Grishina を中心に、M. I. Nefedov, D. A. Birman, S. M. Makarova, M. A. Lobyntseva, V. A. Kozhevnikov, V. I. Iskol'dskij, G. A. Andreev, Ju. G. Aleksandrov, S. I. Ioanisjan, A. M. Shilkov および V. I. Kornev ら12人のソ連学者によって行なわれた。

本文212頁の本書には3,752の文献があがっている。本書の構成は、12章に分かれ第1章は、(1) マルクス・レーニン主義の創始者たちが東南アジアについて書いた文献、(2) ソ連政府および党の東南アジアに関する刊行物、(3) 文献目録、(4) ソ連における東南アジア諸国の研究史、(5) 東南アジア諸国に関する一般文献および、(6) 地理、(7) 人種、(8) 歴史、(9) 経済、(10) 文化、(11) 言語、(12) 宗教に関する文献を掲げている。

第2章以下はロシア語のアルファベット順で地域別に分かれており、第2章 ビルマ、第3章 英領北ボルネオ、第4章 ベトナム、第5章 インドネシア、第6章 カンボジア、第7章 ラオス、第8章 マラヤとシンガポール、第9章 サラワク、第10章 タイ、第11章 ティモール、第12章 フィリピンとなっている。地域別文献の量によって、ソ連における研究の関心がどの地域に向けられているかがほぼ推察できる。すなわち、最も文献が多いのはインドネシアの884とベトナムの846とであって、他はずっと少なく、ビルマの324、マラヤおよびシンガポールの252、フィリピンの222、タイの142という順になっている。ソ連の研究がインドネシアとベトナムとに集中されていることは、色々な意味で興味深い。政治的に不安定で、ソ連の対外政策にとって重要な国々ほど、ソ連の研究者の関心をひいているといってもいいすぎではなからう。1950年代末までに発表されたソ連の東南アジア関係の研究が一望の下に見渡せるという点で、本書はきわめて有益な文献目録である。グーベル教授の御好意と、教授をセンターに紹介された、京都大学人文科学研究所貝塚教授および日比野助教授の御高配に心から感謝し、京都大学東南アジア研究センターが今後国際的な学術交流に寄与することを祈念したい。

(猪木正道)